ケアハウス居住者の生活展開と生活領域の拡がりに関する研究

A STUDY ON THE RELATIONSHIPS BETWEEN BEHAVIOR
AND TERRITORIES OF ELDERLY IN "CARE HOUSES"伊佐地 大輔*, 上野 淳**
Daisuke ISAJI and Jun UENO

The aim of this paper is to clarify the expansion of activities and living territory held at each space of elderly inhabitants of "Care House". The results of the analysis are as follows.

- 1) The place formed by various activities in room were fully understood and classified. 2) Features of living activity related with programs held at common space and other activities were clarified. 3) To act in outer space, inhabitants choose each facility and place. The effects to those acts and territories by environments of location were recognized. 4) Features of expanding territories were differ by each acts, seemed they had four qualities; staginess, selectivity, development and attachment. Points written above classified whole activities.

keywords : Care House, The Elderly, Behavioral Environment, Activities of daily life, Living Territory
ケアハウス, 高齢者, 行為環境, 生活展開, 生活領域

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的 人口高齢化の進展に対応して, 高齢者施設の量的・質的充足に向け, 様々な施策が展開されている。この中でケアハウスは, 一定の身体機能の低下があるものの, ある程度自立した生活が可能な高齢者がスタッフの生活サポートのもとに集まって居住する集住の形式であり, 施設処遇から在宅処遇へと施策の重点をシフトしようとする全体的な傾向の中で, 今後, 重要な位置を占めるものと考えられる。1989年に経費老人ホームのC型として初めて位置づけられ, ゴールドプラン21では10.5万人分の整備が目標とされている。ケアハウスの制度概要を表1に表す。サービスやサポートの構成を整理すると以下ようになる。1) 生活基礎(食事・入浴)については施設サービスを利用。2) 生活支援についてはスタッフの生活サポートをうけ, 介護・援助は外部の在宅サービスを利用。3) 生きがい等については施設の共用空間や外部の施設を利用。このように居住者は, 施設側からサポートをうけつつ, 共用空間や外部空間を利用することにより, 個々の身体状況にあわせ, 自立した生活を過ごすことが目標とされる。

こういった背景を踏まえると, ケアハウスを計画する際には, 居住者個々人の身体状況や加齢に対応し自立した活動を支えていく環境を整えると共に, 地域活動を念頭にいた立地環境を重視するこ

とも大切になってくると考えられる。そこで, 本研究ではケアハウスを施設単体として捉えるのではなく, 1) 居室・共用空間・外部(地域)空間と連続する行為環境の場として捉え, この各段階の連続性の中で生活実態を詳細に把握することにより, 居住者の生活構造を解明していくこと, 更に, 2) 高齢者個人の生活にとって, また, それぞれの行為にとって, 各空間がどのように意味づけられているかを考察していくこと, を目的としている。これらにより, 住まいの場(住宅)として地域社会における活動を主としつつも, 自立した生活を可能とするケアハウスのあり方を探っていこうとするものである。

表1 ケアハウスの制度概要

対象者	原則60歳以上であり, 自炊ができない程度の身体機能の低下等が認められ, 又は高齢等のため独立して生活するには不安が認められる者であって, 家族による援助を受けることが困難な者。
開設者	都道府県, 市町村, 社会福祉法人, 財団, 社団, 農協, 医療法人等(施設整備費は対象外)
定員	30人以上(併設の場合は15人以上)
スタッフ配置	定員50人(単独設置)の場合: 9人※内非常勤2人まで可 : 施設長1, 生活指導員1, 煮母1, 栄養士1, 調理員等4(2)
サービス内容	・生きがい確保や健康の維持・増進, 緊急対応, 相談など ・食事の提供や入浴準備など (日常生活援助や介護は在宅サービスを利用)
利用方法	利用者と施設の契約
費用	利用料は原則として全額自己負担。 ・事務費 約1~5万円/程度(月額) ※収入により増減 ・生活費 約4.5万円/月程度(月額) ・管理費 300~500万円程度が平均(一括, 一括+月々, 月割の3通りの支払い方法がある)※経事業費の自己負担回収分により設定される

* 東京都立大学大学院 大学院生・修士(工学)

** 東京都立大学大学院 教授・工博

Graduate Student, School of Architecture, Graduate School of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., M. Eng.
Prof., School of Architecture, Graduate School of Engineering, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

ケアハウスに関する既往研究をみると、小川(1995)らは、施設タイプの分類、入居者の属性、入居による余暇の過ごし方や外出頻度の変化を把握し(文1)、森永(1996)らは入居理由や入居前後の住宅実態を把握し転居のプロセスについての把握を行っている(文2)。しかし、本研究のように高齢者の日常生活の実態を詳細に捉え、施設空間だけでなく外部(地域)空間も含んだ生活領域の拡がりを捉えること、また、各空間における生活展開の詳細を把握するなかから、それぞれの空間が持つ意味づけを把握していくこと、などは充分にはなされていないと考えられる。施設整備は進んできたとはいえ、建築計画学分野におけるケアハウス研究の蓄積は、特別養護老人ホームをはじめとする福祉施設研究に比べて充分なものとはいえず、その評価は定まっていないと考える。

1.2. 研究の方法 本研究では、ケアハウス居住者の生活像を捉えるのにあたり、その立地条件(周辺の地域環境)や施設内の共用空間の設け方(平面構成)の違いを考慮することが必要になってくる。そこで、本研究では平面構成および立地環境において、それぞれ特徴をもつケアハウス3施設を調査対象として取り上げている(表2、図1)。H12年9月～12月にかけて、①居住者属性調査、②施設内1日の観察調査、③居住者の活動行為と活動場所についてのアンケート・ヒヤリング調査、④居室内の実測調査、⑤スタッフへのヒヤリング調査、を行った。調査の概要を表3にまとめる。本稿の構成は、2章で居住者個人の生活展開の全体像、生活領域の拡がりの概要を捉え、3、4、5章で住戸(自室)・(施設内)共用空間・外部空間(地域空間)の各領域段階において、居住者がどの様に生活を展開しているかについて考察を行っている。これらを踏まえ、

図1 調査対象施設の平面概要

表2 調査施設の概要

	ケアハウス:RG	ケアハウス:SC	ケアハウス:CR
所在地	埼玉県越谷市	東京都武蔵野市	埼玉県志木市
開設年	H11.4	H8.6	H9.4
居室構成	単身 38戸 夫婦 6戸 浴室なし	単身 26戸 夫婦 2戸 浴室あり	単身 25戸 夫婦 4戸 浴室なし
平面構成	2層、片廊下型	2層、片廊下型	1層、回廊型
共用空間配置	1Fに諸室を集中して配置、廊下端にエレベーター	各階に分散配置	食堂を中心に分散配置、廊下端にエレベーター
立地	駅へのバス便は少ない 周辺地域は商店が1つあるだけ、前面道路は幹線道路であり、散策には適さない。	駅へのバス便が多い 周辺地域は小さな商店街がある、緑道や公園があり、散策に適する。	駅へのバス便は多い。 周辺地域は市役所・商店街・福祉センター等の地域施設が充実、親水公園が近接する。
併設機能	単独型	デイサービスセンター 在宅介護支援センター 学生寮	デイサービスセンター 在宅介護支援センター 特別養護老人ホーム

表3 調査概要

1. スタッフへのヒヤリング調査	各施設のスタッフに施設概要・運営概要方針・居住者属性についてヒヤリング
2. 施設内行動観察調査	施設内の1日の共用空間における居住者の活動場面について図面上に記録
3. 居住者に対するアンケート・ヒヤリング調査	RG施設25名、SC施設14名、CR施設19名の計54名について実施。以下の項目について調査。 ①属性(性別・年齢・身体状態・入居時期など) ②行為内容別の活動場所・頻度 ③1日の活動内容・場所・相手
4. 居室実測調査	RG施設9名、SC施設4名、CR施設8名の計21名の居住者に対して実施家具や所持品について平面図に記録、居室の使い方や居場所についてヒヤリング。

表4 居住者属性

	ケアハウス:RG	ケアハウス:SC	ケアハウス:CR
入居者数/定員	42/50	29/30	33/33
性別	男 8 19.0% 女 34 81.0%	男 6 20.7% 女 23 79.3%	男 6 18.2% 女 27 81.8%
年齢	～64 2 4.8% 65～69 2 4.8% 70～74 11 26.2% 75～79 11 26.2% 80～84 13 31.0% 85～89 1 2.4% 90～ 2 4.8% 平均 77.2	～64 1 3.4% 65～69 0 0.0% 70～74 6 20.7% 75～79 3 10.3% 80～84 9 31.0% 85～89 8 27.6% 90～ 2 6.4% 平均 80.6	～64 0 0.0% 65～69 0 0.0% 70～74 2 6.1% 75～79 9 27.3% 80～84 9 27.3% 85～89 8 24.2% 90～ 5 15.2% 平均 82.6
要介護度	なし 40 95.2% 要支援 1 2.4% 要介護Ⅰ 0 0.0% 要介護Ⅱ 1 2.4% 要介護Ⅲ 0 0.0% 要介護Ⅳ 0 0.0% 要介護Ⅴ 0 0.0%	なし 18 62.1% 要支援 2 6.9% 要介護Ⅰ 5 17.2% 要介護Ⅱ 3 10.3% 要介護Ⅲ 1 3.4% 要介護Ⅳ 0 0.0% 要介護Ⅴ 0 0.0%	なし 20 60.6% 要支援 6 18.2% 要介護Ⅰ 4 12.1% 要介護Ⅱ 2 6.1% 要介護Ⅲ 0 0.0% 要介護Ⅳ 1 3.0% 要介護Ⅴ 0 0.0%
移動手段	歩行可 38 90.5% 杖 3 7.1% 歩行器 0 0.0% 車椅子 1 2.4%	歩行可 19 65.5% 杖 5 17.2% 歩行器 3 10.3% 車椅子 2 6.9%	歩行可 25 75.8% 杖 4 12.1% 歩行器 3 9.1% 車椅子 1 3.0%
利用介護サービス	ホームヘルプ 2 4.8% デイサービス 2 4.8% 予約介護 0 0.0% 訪問看護 0 0.0%	ホームヘルプ 11 37.9% デイサービス 4 13.8% 予約介護 1 3.4% 訪問看護 0 0.0%	ホームヘルプ 12 36.4% デイサービス 7 21.2% 予約介護 0 0.0% 訪問看護 1 3.0%
居住期間	～6ヶ月 1 4.0% 6ヶ月～1年 6 24.0% 1年～2年 18 72.0% 2年～3年 0 0.0% 3年～5年 0 0.0%	～6ヶ月 0 0.0% 6ヶ月～1年 1 7.1% 1年～2年 1 7.1% 2年～3年 3 21.4% 3年～5年 9 64.3%	～6ヶ月 1 5.3% 6ヶ月～1年 3 15.8% 1年～2年 4 21.1% 2年～3年 3 15.8% 3年～5年 8 42.1%

※居住期間は居住者アンケート・ヒヤリングより

6章で各行為における空間の拡がりの考察を行っている。

1.3. 居住者属性 調査対象者の属性を表4に示す。入居条件より、自立している高齢者が中心となっているものの、特別養護老人ホームに移り住むまでの期間を住まう居住者も存在する。このため、要介護度の分布をみると[なし]から[要支援]、[要介護Ⅳ]までみられるなど、居住者の属性は多様である。施設別にみると、RG施設は年齢、要介護度ともに低く、自立高齢者中心である。SC施設は開設から4年以上が経過しており継続居住者が多いためか、要介護度も相対的に高くなっている。CR施設は年齢は高いが、自立した高齢者が多いのが特徴である。

2. 生活展開と生活領域の拡がり

居住者の生活は、住戸、共用空間、外部空間のそれぞれで閉じているのではなく、生活展開は連続性を持ち、かつ、相互に関連性を持っている。以下では、調査⑨より得られたデータをもとに、生活領域を住戸・共用空間・外部空間に分け、1日の生活や行為がそれぞれの領域においてどのように展開されているかについて、その概

要、全体像を把握しようとする。

2.1. ケアハウス居住者の1日の生活展開の事例 生活領域の広がりを具体的に表すため、居住者の1日における特徴的及び典型的な生活展開事例(図2)を4例示す。[事例1]は食事・入浴のプログラム以外を自室内で過ごし、TVやCD等の静的活動を中心に1日を過ごしているケースである。[事例2]では施設内の友人との交流が頻繁に行われており、食堂や友達の部屋から外部空間にまで領域が広がっていく様子がみられる。[事例3]では前者と同様に施設内での交流活動が行われているが、共用諸室でのサークル活動が主となっている。[事例4]では敷地周辺や周辺地域における趣味・交流活動を主とする事例である。このように個人の生活展開は多様であり、生活領域の広がりについても幾つかの特徴がみられる。

1日における生活場所を住戸・共用空間・外部空間に分類し、その1人1人の時間内訳の分布を図3に示した。注1) 全体的には自室内での生活が中心であるが、共用空間・外部空間への分布の広がりがみられ、居住者がそれぞれに諸空間を使いこなしている様子が伺える。次に、年齢構成との関係で生活領域の使い分けをみると(全調査対象者年齢階層別平均)、加齢により、自室内における活動が増加し、外部空間での活動が減少する傾向がみられる(図4)。対して、共用空間での活動は、加齢による変化はあまりみられない。これらは加齢に対する共用空間の有用性として捉えることができる。

2.2. 生活行為の種類と生活領域の広がり 次に、居住者の生活行為の内容についてみる。本調査により把握された生活行為について整理し、NHK 国民生活時間調査の行動分類を参考に、表5のように分類した。分類された各行為別の広がりの様子を表すため、各空間における行為人数割合を表6に整理した。注2) これより、睡眠、買い物のようにある空間でのみ行われる行為、食事や入浴のようである空間で行われるが他の空間でも行うことがある行為、また、趣味、

運動など余暇活動や交流のように各空間に広がって行われる行為など、各行為内容により、それぞれの空間の広がりの特徴がみられた。

3. 住戸空間の使われ方

調査③に加え、調査④で21名の居住者に対して、住戸内の家具や所持品の実測調査を行った。表7に調査④の居室実測調査の概要

図3 生活場所別滞在時間内訳の分布

図4 生活場所別滞在時間内訳の年齢別平均

表5 生活行為の分類

大分類	中分類	細分類	大分類	中分類	細分類
基本的な生活行為	睡眠	睡眠	余暇活動行為	趣味	写真
	食事	食事			ハスル
	入浴	入浴			園芸・庭いじり
	雑事	身の回りの用事			ゲーム・大正琴
静的活動行為	静的	テレビ・ラジオ		運動	民謡
		新聞・雑誌			入浴・体操
		ラジオ・CD			ラジオ体操
社会活動行為	家事	掃除・洗濯		散歩	ヨガ
	買い物	買い物			ダンス
	仕事	仕事			ゲーム
	社会参加	ボランティア		鑑賞	歌をみる
余暇活動行為	通院	通院			映画・音楽
	趣味	手芸・模型		交流	集まり
		絵画・油絵			カラオケ
		水書画・俳句			仲間との交流
		俳句・短歌	会話・交流行為	交流	施設外友達との交流
		料理			施設内友達との交流
		読書			家族との交流
		習字・書道			

表6 生活領域の広がり

大分類	中分類	行為人数割合			
		住戸内	共用空間	外部空間	
基本的生活行為	睡眠	●			凡例 ○ ~5% ◎ ~10% ⊙ ~30% ⦿ ~50% ⦿ ~70% ⦿ ~100%
	食事	○	●	○	
	入浴	○	●	○	
	雑事	●			
静的活動行為	静的	●	⊙	⊙	
	家事	●	⊙		
社会活動行為	買い物			●	
	仕事	○		○	
	社会参加		○	○	
	通院		○	●	
余暇活動行為	趣味	●	●	●	
	運動	⊙	⊙	○	
	散歩		○	●	
	鑑賞			⊙	
	娯楽	○	○	⊙	
	交流・交友行為	●	●	○

図2 居住者1日の生活展開の事例

■ プログラム ○ サークル □ その他交流活動

と住戸構成を示す。ここでは住戸空間に着目し、そこで行われる生活展開と所有する家具・物による住戸空間のしつらえについて明らかにし、対応関係について考察する。

3.1. 住戸内における生活展開 調査③より得られた1日の生活時間のうち、住戸内に滞在している時間の割合（住戸滞在率）を図5に示した。個人により滞在の割合は異なり、広い範囲で分布がみられる。しかし、平均すると69%程度（睡眠時間を加えた割合では約80%）と1日の大部分を住戸内で過ごしていることがわかる。ケアハウスにおける住戸空間の重要性が再確認される結果であるといえる。住戸内で行われる行為の時間割合をみると、TV・休憩を中心とした静的活動の割合が45.6%と高く、次いで基本的な生活行為、社会活動行為となっている。余暇、会話・交流行為はあわせて5.7%程度であるが、表8にみられるとおり、頻度は高くないものの行為の種類は多岐にわたっている。ケアハウスの住戸は個人の活動の多様性を支える場として捉えることができる。

3.2. 住戸内の家具の保有状況と家具密度 調査④より得られたデータから、主室の内法面積に対する床に置かれた家具の面積を家具密度として計測し、個々人について入居期間との関係を示したものが図6である。施設によっては入居時に持ち込む家具が制限されることがあるなど、入居当初の家具密度はあまり高くないものの、入居期間が長くなるにつれ増加の傾向を示している。主室の家具密度は、平均で30~40%と捉えることができるが、最大で60%に近い密度のもの[図7-事例2]もみられている。SCやCR

表7 居室実測調査の概要と住戸構成

	RG施設	SC施設	CR施設
調査数 ※調査は単室のみ	8名	4名	9名
住戸構成			
住戸面積	30.0㎡	21.7㎡	21.8㎡
主室面積	14.8㎡ (49.3%)	10.3㎡ (47.5%)	17.1㎡ (78.4%)
収納面積	6.9㎡ (23.0%)	1.5㎡ (6.9%)	-
浴室・トイレ面積	3.0㎡ (10.0%)	3.7㎡ (17.1%)	2.6㎡ (11.9%)
バルコニー面積	6.1㎡	6.7㎡	-

事例1 RG3
年齢：90歳
性別：女性
居住期間：11ヶ月
家具密度：41.9%
滞在率：85.4%

事例2 SC7
年齢：85歳
性別：男性
居住期間：41ヶ月
家具密度：57.8%
滞在率：76.0%

事例3 CR11
年齢：74歳
性別：女性
居住期間：30ヶ月
家具密度：53.5%
滞在率：72.9%

図7 住戸内のしつらえと場の形成事例

図5 住戸滞在率

図6 主室の家具密度分布

表8 住戸内で行われる行為

大分類	一日の 時間内訳 ※睡眠除く	中分類	細分類	行為人数割合			
				RG	SC	CR	
基本的な生活 行為	○ 10.3%	睡眠	睡眠	●	●	●	凡例 ○ ~5% ○ ~10% ○ ~30% ● ~50% ● ~70% ● ~100%
		食事	食事	○	○	○	
		入浴	入浴	○	○	○	
		着替	身の回りの用事	○	○	○	
静的活動 行為	○ 45.6%	静的	テレビ・ラジオ	○	○	○	
			新聞・雑誌	○	○	○	
			ビデオ・CD	○	○	○	
			休憩	○	○	○	
社会活動 行為	○ 7.0%	家事	掃除・洗濯	○	○	○	
		仕事	仕事	○	○	○	
余暇活動 行為	○ 4.0%	趣味	手芸・編物	○	○	○	
			折り紙	○	○	○	
			絵画・油絵	○	○	○	
			水墨画・俳画	○	○	○	
			俳句・短歌	○	○	○	
			料理	○	○	○	
			習字・書道	○	○	○	
			写真	○	○	○	
			パズル	○	○	○	
			民謡	○	○	○	
			パチンコ・大正琴	○	○	○	
			園芸・庭いじり	○	○	○	
			ストレッチ・体操	○	○	○	
			ラジオ体操	○	○	○	
カラオケ	○	○	○				
会話・交流 行為	○ 1.7%	交流	○	○	○		
		施設外友達と交流 家族との交流	○	○	○		

住戸内 合計 68.6%

表9 住戸内に形成される場の分類

a. 読書・療養の場	ベッドやサイドテーブルにより形成される。治療用のベッドを持ち込んでいるケースもみられる。	d. 仏壇・お祈りの場	タンスの上に仏壇などが置かれ、場として形成されていない場合もあるが、人によっては、座布団などにより形成されるケースもある。
b. TV・新聞の場	TV・新聞に加え、ぼーとするなどの行為が行われる。対面の目的はTVや新聞などがみられる。	e. 身支度の場	洗面所や、化粧などにより形成されるケースもみられる。
c. 趣味・教養の場	テーブルと行為に合わせた数からなるTV・新聞の場と共用されることが多いが、別に設けられるケースもある。	f. 友人・客人の場	友人のためのみずや座布団が用意され形成される。

表10 場の形成事例

施設	番号	属性	要介護度	家具密度	住戸内で行なわれる行為	場の数	場の重複	場の形成の状況
RG	1	84歳	なし	27.4%	TV, 新聞, 休憩	2	0	(a),(b)
	2	81歳	なし	29.2%	TV, 読書, 休憩	2	0	(a),(b)
	3	90歳	なし	41.9%	交流, TV, 新聞, 療養	4	0	(a),(a),(b),(f)
	4	64歳	なし	20.3%	TV, 休憩	3	0	(a),(b),(b)
	5	81歳	なし	40.0%	交流, TV, 新聞, 読書, 休憩	2	1	(a),(b),(f)
SC	6	83歳	要支援	59.9%	手芸, 音楽鑑賞, 読書, TV, 休憩	2	1	(a),(b+c)
	7	85歳	なし	57.8%	カラオケの練習, 仕事, ラジオ, TV, 休憩	1	2	(a+b+c)
	8	87歳	要支援	44.6%	交流, 短歌, TV, 新聞, 休憩	2	1	(a),(b+c+d)
	9	76歳	なし	45.2%	CD, TV, 休憩, 身支度, 体操	3	0	(a),(b+c),(e)
CR	10	83歳	要介護1	37.6%	交流, お祈り, TV, 休憩, 体操	3	0	(a),(b+c),(f)
	11	74歳	要支援	53.5%	交流, ワークプロ, 習字, TV, 休憩, 身支度	4	1	(a),(b),(c),(e+f)
	12	80歳	要介護1	32.1%	交流, 読書, TV, 休憩, 体操	3	0	(a),(b),(f)
	13	83歳	なし	37.1%	お祈り, TV, 休憩	2	1	(a),(b+c)
	14	72歳	要支援	42.6%	習字, ワークプロ, 読書, お祈り, TV, 休憩	3	1	(a),(b+c),(d)

4.2. プログラム・サークルおよびその前後における生活展開の様子

調査②より、共用空間において観察された生活展開の様子を、プログラム・サークル時間と自由時間に分けてみていく。

ケアハウスにおける1日の流れは、概ね全員が参加する食事・入浴の活動と入居者が選択して参加するサークル活動の時間帯、および、その間に行われる自由時間により成る(図9)。プログラム時間にあわせ入居者は集合と離散を繰り返し行うが、その集合と離散の間に交流活動が多く行われ、いくつかグループが形成される様態が観察された。さらに、そこから他の場所に移り活動が展開される様子もみられた(図10)。このように、プログラム時間はそれだけの活動としてだけでなく、人が集まることにより行為を展開していく可能性をもっていることが確認できた。

4.3. 自由時間における生活展開の様子

自由行動は施設内の友達との交流や散歩、又はそれらに伴う休憩が中心である。交流や休憩は散歩や外出又はプログラム場面からの移動の動線上にある廊下やオープンに設けられている空間のコーナーやソファで多く観察される。反面、居室群の端にあるコーナーの利用はほとんどみられない。各施設とも娯楽室等の共用諸室が設けられているが、壁で囲まれ閉じた共用諸室はサークル活動以外では利用されにくい傾向がある。

また、身体に不安のある高齢者が廊下で散歩を行う場面は、長い廊下がある施設にみられる特徴的な行為であり、このような廊下空間は歩行訓練のための一種のリハビリテーション空間としての機能を果たしているとみることもでき、自立生活を支える空間として重要であると考えられる。(図11)。

居室との関係で共用空間の利用状況を見ると(図12)、住戸に近い共用空間を、くつろぐ、お茶、新聞など居間的に利用する行為や自室前の廊下空間を飾りつける、動植物の世話をする行為など、一般に私的な空間で行われるような行為が隣接する共用空間で行われる様子がみられた。

5. 外部空間の使われ方

5.1. 外部空間における生活展開

1日における外出行動の時間割合は平均すると9%(睡眠時間を加えた割合では6%)と多くないが、1人1人についてみると、多いもので45%の時間を施設外で過ごす人もみられ、個々人の行動タイプによって様々である。

同様に、1週間における外出件数の分布(図13)をみると、外部空間の使われ方は一様ではなく、個人による差がかなりみられる結果となっている。また、施設別にも頻度の状況が異なり、SC施設では10.3件/週と高いのに対し、CR施設では3.7件/週と極端に低くなっている。SC施設は敷地周辺に行為を行える場所が多く

図13 施設別の外出件数分布

図14 施設別の圏域別平均外出件数

表12 外部空間で行われる行為

大分類	一日の 時間内訳 ※睡眠除く	中分類	細分類	行為人数割合			行為場所割合			凡例
				RG	SC	CR	敷地 周辺	周辺 地域	その他 外部空間	
基本的な生活行為	○ 0.4%	食事	食事	○	○	○	○	○	○	凡例
		入浴	入浴	○	○	○	○	○	○	
		通院	通院・健康診断	○	○	○	○	○	○	
静的活動行為	○ 0.7%	静的	新聞・雑誌	○	○	○	○	○	○	○ ~10%
		静的	休憩	○	○	○	○	○	○	
社会活動行為	○ 1.3%	買い物	買い物	○	○	○	○	○	○	○ ~30%
		仕事	仕事	○	○	○	○	○	○	
		社会参加	ボランティア	○	○	○	○	○	○	
余暇活動行為	○ 2.6%	趣味	手芸・編物	○	○	○	○	○	○	○ ~50%
			絵画・油絵	○	○	○	○	○	○	
			水園芸・俳句	○	○	○	○	○	○	
			俳句・短歌	○	○	○	○	○	○	
			料理	○	○	○	○	○	○	
		運動	雪見	○	○	○	○	○	○	○ ~70%
			民謡	○	○	○	○	○	○	
			スリッパ・体操	○	○	○	○	○	○	
		散歩	3D	○	○	○	○	○	○	○ ~100%
			ダンス	○	○	○	○	○	○	
		散歩	アル	○	○	○	○	○	○	○ ~100%
			散歩	○	○	○	○	○	○	
余暇活動行為	○ 0.4%	交流	劇をみる	○	○	○	○	○	○	○ ~10%
			ライブ・ジャズ	○	○	○	○	○	○	
			講演会	○	○	○	○	○	○	
余暇活動行為	○ 0.4%	交流	囲碁	○	○	○	○	○	○	○ ~10%
			カラオケ	○	○	○	○	○	○	
余暇活動行為	○ 0.4%	交流	施設外友達と交流	○	○	○	○	○	○	○ ~10%
			家族との交流	○	○	○	○	○	○	

外部空間 合計 8.6% (移動3.2%含む)

図15 活動圏域と利用施設 (件/週)

みられ、その影響から敷地周辺における外出頻度が高くなっていると考えられる（図14）。前述した加齢による外出活動の減少とは別に、施設内外の地域環境が影響しているものと思われる。

外部空間で行われる行為（表12）をみると、買い物、散歩、通院・健康診断が上位を占める。それ以外の行為も頻度は低いものの、外部空間において多様な行為が展開されていることがわかる。

5.2. 活動圏域と利用施設 外部空間における圏域の広がりには、各行為種類により異なる様相がみられる（図15）。それぞれの行為をみていくと、買い物では主に敷地周辺における商店やスーパーで行われる。RG施設では敷地周辺にある商店に外出件数が集中するなど、外部空間の構成により空間の広がり様相が異なる。周辺地区外への買い物もみられたが、これも交通利便性の高いSC施設で多くみられるなど立地環境により傾向が左右される。趣味・娯楽行為は散歩を除いては、それぞれ行為人数が少ないが様々な種類の行為がみられる。これらの行為の利用施設は、公民館、コミュニティーセンター、福祉センター、デイサービスセンターなど地域のコミュニティー施設において行われ、多くは講座やサークルでの活動と考えられる。周辺地区にかかわらず、広域的な範囲での展開がみられており、個々人の属性や好みにより選択が行われているものと思われる。散歩は敷地周辺で行われ、行為人数割合が高く、日常的な行為といえる。共用空間の廊下とを使い分け行われている。外出行動はほとんど行わないが、散歩だけを行うといった居住者も多くみられる。病院・健康診断は半数程度の行為人数の割合がみられる。敷地周辺の診療所等で行われる割合は少なく、比較的大きな病院への通院が多くみられ、広い範囲へ展開されることが特徴である。

6. 広がりからみた各行為の分類と性格

前段において各空間ごとに行われる行為についての把握を行ってきたが、ここでは、各行為における空間の広がり特性に着目し、行為の分類を行っている（表13）。

〈特定性〉特定の空間でのみ行われる行為であり、空間の広がりにはみられない。

〈施設選択性〉外部空間において施設や場所を選択して行う行為であり、外部空間の施設環境などが空間の広がり大きく影響を及ぼす。行為の種類によっては、個々人の属性にあった選択が行えないことにより行為が行われなくなるなど、いわゆる行為の潜在化がおこる可能性を持つ。

〈空間選択性〉自室内、共用空間、外部空間において、入居者個人の状況や好みにあわせ、空間を選択して行う行為であり、〈施設選択性〉と同様の性格を持つ。

〈展開性〉他の空間で行われる活動と関連し、場所を移し異なる様態の行為として展開されるものである。例えば外部空間の施設で行ったサークル活動に関連し、自室内でその活動を行うようなことがあてはまる。各空間に連動して広がっていく性格を持つ。

〈付属性〉他の行為に付帯し、様々な空間において行われる行為であり、他の行為の広がりに関連し、同様の広がり様態を表す。

して得られた知見について述べる。

①住戸空間での活動は多様であり、それらの活動にあわせ幾つかが場が形成されることがわかった。また、それらの場の形成は、持ち込まれる家具などとの関係により難しくなることも考えられるため、場の形成の様態に対応した住戸空間の充実が必要と考えられる。

②共用空間における活動は、廊下やオープンな空間のコーナやソファが重要な役割を果たしていることがわかった。しかしながら、単に場所を設けるのではなく散歩や外出又はプログラム活動への移動など、共用空間における生活展開の様態にあわせた空間の構成が必要と考えられる。

③外部空間での活動は居住者が各施設や場を選択して行われ、それらの行動は立地環境により、大きく影響を受けることがわかった。

④居住者の中には、加齢とともに身体能力が低下し、共用空間と自室での活動が主となる人もいるため、外部空間で行われる活動の幾つかについては共用空間で対応していくことも課題として捉えることができる。

⑤各行為ごとに領域の広がり特性は異なり、段階性、選択性、展開性、付属性がみられる。それらの様態により各行為を分類することができた。これら各行為の広がり特性にあわせた空間の構成が求められる。

表13 生活領域の広がりからみた行為分類

行為分類	定義	住戸内	共用空間	外部空間	行為種類
空間特定型行為	特定の空間において行われる活動（特定性）	●			睡眠、喫煙、電話、読書、テレビ視聴、バス、お風呂・大正琴、ラジオCD、趣味娯楽
施設選択型行為	外部空間の施設を入居者の状況や好みにあわせ、選択して行われる活動（施設選択性）		●	○	食事（日常的なもの）、病院・健康診断、買い物、リハビリ、介護、鑑賞
空間選択型行為	入居者個人の状況などにあわせ、空間を選択して行われる活動（空間選択性）	○←→○	○←→○	○	散歩、洗濯、入浴、ラジオ聴取、鑑賞・庭いじり
展開型行為	活動の様態を展開させて、連続的に行われる活動（展開性）	●←→○	○←→○	○	趣味娯楽（サークル・講座）、家族との交流
付属性行為	他の活動に付帯し、様々な空間において行われる活動（付属性）	●←→○	○←→○	○	自室での趣味娯楽（サークル・講座への展開）、CH友達との交流、写真、外部空間でのCH友達との交流
		●←→○	○←→○	○	休憩、新聞・雑誌、テレビ、食事（日常的なものを除く）交流

謝辞

末筆ながら調査にご協力頂きました各施設の入居者の皆様とスタッフの方々にお礼を申し上げます。

7. まとめ

以上から、ケアハウス居住者の生活展開と生活領域の広がりに関

注釈

- 1) 1日の時間内訳は睡眠時間を除いた内訳として表している。
(図3, 図4, 表8, 表11)
- 2) 行為人数割合は, 1週間の活動においてみられた人数の割合(延べではない)である。表6の食事を例にすると, 共用空間では54/54で100%となり, 住戸内では2/54で4%ということになる。したがって各行為ごとの割合は100%にならない。行為場所割合は, 各行為の頻度を場所別の割合として表している。このため, 合計は100%である。
(表6, 8, 11, 12)
- 3) プログラム活動とは, 食事, 入浴, ラジオ体操などの施設側から提供されるメニューを指す。
- 4) サークル活動は, ボランティア, レクリエーションの活動であり, 入居者が自発的に参加するものである。外部空間においては講座やレクリエーション等の教室も含む。

参考文献

- 1) 小川正光他:ケアハウスの施設計画と入居者の実態 その1~3, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 5-10, 1995
- 2) 森永光典他:ケアハウスの生活拠点移動(リロケーション)に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp. 231-234, 1996
- 3) 野村敏, 高山忠雄編:長寿社会総合講座6 高齢者の住環境, 第一法規出版, 1993. 12
- 4) NHK放送文化研究所:現代日本人の意識構造第4版, NHKブックス 1998
- 5) 伊佐地大輔他:ケアハウス居住者の生活展開と行為空間の広がりに関する研究 その1~2, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2001

(2001年9月5日原稿受理, 2002年3月25日採用決定)